

## 1 研究テーマ

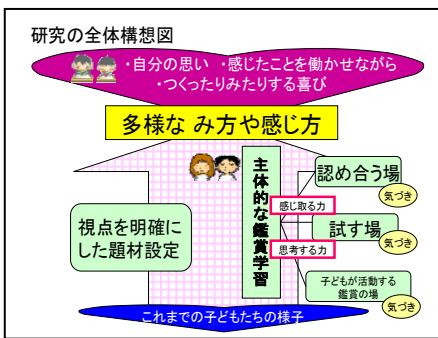
「多様なみ方や感じ方を育てる図画工作科 ～視点を明確にした主体的な鑑賞学習の展開を通して～」

## 2 はじめに

平成20年3月に告示された新学習指導要領では、図画工作科の目標の中に「感性を働かせて」という文言が新しく加えられた。これは、子どもたちの感じたことを、これまでより一層重視していくことを示している。また、言語活動を取り入れるなどした鑑賞の学習も重視されている。しかし、現状としては、鑑賞の学習への取組みは消極的であり、作品を仕上げるのがねらいとなってしまうことも少なくない。鑑賞カードに「上手」「きれい」などの概念的な表現がみられることから、子どもたちの中にあるよさや美しさの枠組みを広げたり深めたりしていくこと、言い換えると、子どもたちの「多様なみ方や感じ方を育てていくこと」が必要なのではないかと考え、特に、今まであまり取り組まれていなかった鑑賞学習の展開を通しての研究をすすめていくことにした。

## 3 研究の目的

多様なみ方や感じ方が育つ図画工作科の学習のあり方を探る。



### 《仮説》

小学校図画工作科の鑑賞の学習において次のように行えば、多様なみ方や感じ方を育てることができるであろう。

- (1) 題材設定においてみる視点を明確にする。
- (2) 学習の展開において「主体的な鑑賞学習」(子どもの活動がある・感じたことを試す場がある・認め合う場がある)を行う。

「みる視点を明確にする」…色や形など、もののよさや美しさを構成する要素に対する子どものみ方や感じ方を、確実に深めたり広めたりしていくこと。

「主体的な鑑賞学習を行う」…「感じる力」や「思考する力」を働かせる場となるとともに、様々なことに「気づく」場となり、多様なみ方や感じ方を育てることにつながるもの。

## 4 研究の内容

### (1) 実態把握

#### ① 子どもの実態 (所属校3年生 42名対象 6月実施のアンケートより)

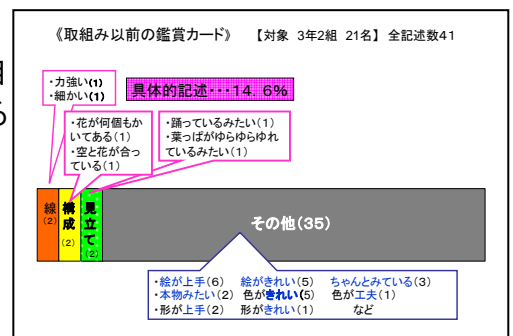
98%が「図工が好き」と答えている。内容については、好きなことに、「工作すること」(59%)をあげ、あまり好きではない内容には、「絵に表すこと」(19%)や「作品をみること」(14.3%)をあげていた。

#### ② 指導の実態 (所属校の教員 11名 6月実施のアンケートより)

図画工作科の指導に「消極的である」という答えが 55%、特に鑑賞の指導に関しては、82%の教員が「消極的である」と答えている。その理由には、鑑賞の対象や評価の仕方、学習の進め方がわからないということがあげられていた。

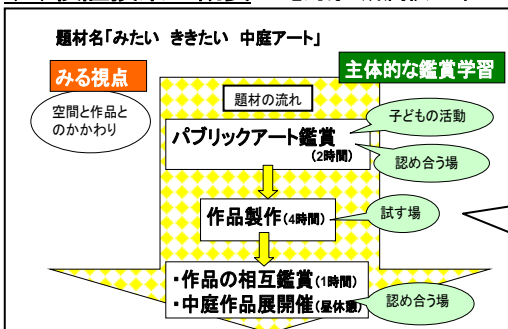
#### ③ 鑑賞カードからみる「よさや美しさを感じ取る力」について(グラフ1)

本研究実践前の相互鑑賞の鑑賞カードを分析した結果、色や形に注目してはいるものの、「上手」「きれい」などの表現が多く、線や絵から伝わる雰囲気など具体的な表現をしている児童はわずか 14.6%だった。

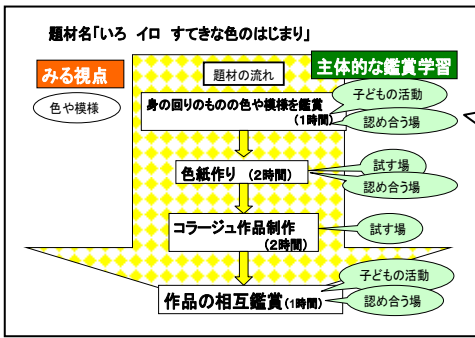


グラフ1 鑑賞カードからみる「よさや美しさを感じ取る力」

### (2) 検証授業の概要 【対象:所属校3年 42名】



授業実践Ⅰ「みたい ききたい 中庭アート」(全7時間) 6月～7月実施  
鳥取にある作品を含め、パブリックアートの写真を10枚鑑賞した。鑑賞の「ルール」は「どんな声がきこえてくるか」を考えることである。それをクイズとして出し合うという活動を行った。

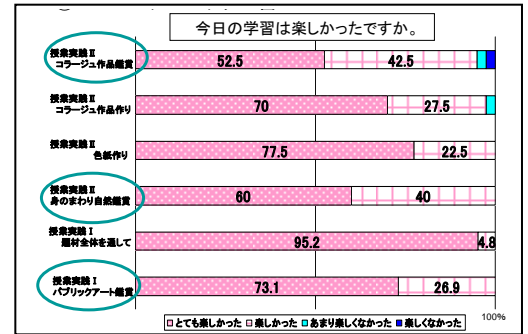


授業実践Ⅱ「いろ イロ すてきな色のはじまり」(全6時間) 11月~12月実施  
身近な自然を、黒いフレームを通して鑑賞した。鑑賞の「ルール」は「どんな色や模様が見えるか」「どんな感じがするか」を言葉にしていけるものである。

### (3) 検証

#### ①学習カードからみる「喜び」について(グラフ2)

検証授業後、「今日の学習は楽しかったですか」という問いに対し、多くが「楽しかった」と答えている。鑑賞が主なねらいである学習(グラフ2)に関しても、平均して92%の子どもたちが「楽しかった」と答えていた。



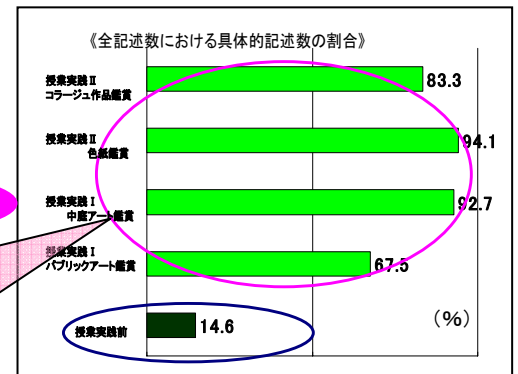
グラフ2 学習カードからみる「喜び」

#### ②具体的な姿からみる「子どもの気づき」について

授業実践Ⅱより 具体例を紹介する。「ざくろ」を見ているうち、透明がみえることに気づいた児童Y。それを友だちとともにみて感じ方を共有したり、角度を変えてみ方を試行錯誤したりする姿があった。また、児童Rは、紙に色を塗っていく活動の中、どのような方法で塗ったらよいかを試行錯誤したり、友だちの「この色に合う色は何か」の問いかけに、「白じゃないかな」と自分の感じ方を伝え合ったりする姿もみられた。

#### ③鑑賞カードからみる「よさや美しさを感じ取る力」について(グラフ3)

研究実践前と同様、鑑賞カードをどのような要素で鑑賞しているかを分析した。検証授業においては、「上手」「きれい」などの概念的表現は減り、具体的な記述が増えていた。視点を明確にしたことと、鑑賞の学習の中に「言葉」を使って表現することを取り入れたからだと考えられる。



グラフ3 鑑賞カードからみる「よさや美しさを感じ取る力」

#### 《記述の具体例》

- ・花だんのところにさしてあって、たくさんみつが集められそうだからいいなと思った。(中庭アート鑑賞)
- ・マンシュマロみたいな色紙がいいなと思った。(色紙鑑賞)

具体的記述 増加

## 5 成果と今後の課題

「視点を明確にした主体的な鑑賞の学習」に取り組んだことにより、子どもたちが「感じ取る力」や「思考する力」を働かせ、様々な気づきを持つことができたと言える。このような鑑賞の学習を計画的に継続して行っていけば、子どもの多様なみ方や感じ方を育てていくことができるのではないかという可能性を感じた。表現の活動だけに偏ることなく、年間指導計画の中に鑑賞の学習をはっきり位置づけること、そして、どのような視点を設定するのか、また、同じ視点においても、子どもの発達段階に合わせどのような学習展開にしていくのかを、実践を積み重ねながら考えていくことが課題である。

### ☆鑑賞の学習のポイント

#### ・視点にそった鑑賞の『ルール』を設定し、それを子どもが獲得できるようにする。

一度獲得した鑑賞の「ルール」を活用して、友だちの作品をみたり、自分の作品に題名をつけたりするなどの姿が見られた。今後の学習においても活用していくことができるものであり、多様なみ方や感じ方へとつながるものであると考える。

#### ・感じたことを言葉にして伝えることを大切にする。

どこがよいのかということ言葉を表すことで、よさや美しさが明確になった。また、言葉を使うことで、友だちとのかかわりが生まれ、自分の感じ方を確認したり友だちの感じたことを知ったりすることとなり、多様なみ方や感じ方を育てていく上では欠かせないものであると感じた。

## 6 おわりに

検証授業を撮影したビデオを分析していくと、子どもたちの感じ取る姿や思考する姿は、様々な場面で見られた。しかし、実際の授業の中でそのような子どもの姿をしっかりと見取ることができたかと言えば、そうではなかった。教員がしっかりと目指す子どもの姿を定め、授業の中での的確な見取りや支援を行うことが重要であることを改めて感じた。それは、図画工作科だけではなく、どの教科・領域でもいえることではないか。

これからも自分自身学ぶ姿勢を持ち続け、実践を積み重ねていきたいと思っている。